

文語の苑

メールマガジン第十一号（平成二十四年五月）

根の深き木

朝鮮史を見るにテレビの韓流番組は格好の手段なり。その一つに現在放映中の世宗のハングル創出に係る番組あり。題して「密本（根の深き木）」と言ふ。

世宗の父太宗の代より、政治の実権を王より奪ひ之を儒教を奉ずる官僚群の手に帰せしめんとする秘密結社あり、「花は花、根となることを得ず」を以つてその標語と為す。これ密本なり。太宗これを弾圧し、その一味多く処刑せらるるも首魁の一子逃れて地下に潜伏す。代変わりて世宗、朝鮮独自の文字を有すべしとて宮殿にて内密にその研究開発を推し進む。また王は仏教に関心を抱き、秘かにその經典を中国より密輸せしむ。これ等の行為儒者の眼よりすれば、儒教の基盤を崩し引いては中華秩序に対し挑戦せんむとするに外ならず。ここに至りて儒教思想に基く官僚政治の確立を目指す密本は地下より出でて政権を奪取せむとす。これより番組の話の展開は、愈々王と密本の本格的抗争に入る。

通史の説くところによらば世宗はその後ハングルの頒布に及ぶも両班はこれを無視し漢文を正式の公用語として用ひ続けたる結果遂にハングルは王朝時代には陽の目を見ることなし。また朝鮮王朝における儒教と官僚の繁栄を見るに、王と密本の争ひは結局後者の実質的勝利に終へたるものと断ぜざるべからず。

かかる番組の背景に存する韓国人の歴史認識に徴するに、韓国に於ける漢字復活の問題は微妙なるもの之あり。文字表記は単なる便宜の問題に非ずして政治的秩序に服するか否かの問題を包含せり。韓国において漢字復活し、かつ、漢字ハングル混じりの表記進まば日中韓間の意思疎通に資すること大にして、吾人もその実現に協力すべきなり。されど肝心の韓国人かかる企てに賛意を表するか否かは俄かに決し難し。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第十一号

小倉百人一首 十一 陽成院

つくばねの峯より落つるみなの川 こひぞつもりて淵となりぬる

関東平野に立つと、西の富士に対して東に見えるのが筑波山です。山頂には男体山と女体山の二峯があるので、この山から流れ出る川を男女（みなの）川と呼びます。この歌は、その男女川を序詞に使って、「あなたへの恋の思ひ（い）が、積り積って深い淵となった」と詠ひ（い）ます。作者陽成院が、陽成天皇として在位していらつしやった頃、後の妃になられる光孝天皇の皇女、綏子内親王にお贈りになった歌です。

陽成院の御母は、前の遍照のところでは取上げた藤原高子（たかいこ）。未だ少女と言ってよい頃在原業平と浮名を流し、実の兄の藤原基経とも、男女の關係があつたとされる奔放な女性です。この人は十八歳の時、僅か九歳の清和天皇の女御として入内し、程経て生れたお子が陽成院、父天皇と同じく九歳で即位され、藤原基経が摂政として実権を握りまゝです。しかし陽成院には、御母高子の血を濃く受け継がれたのか、精神的に不安定なところがおありでした。宮中での暴力的な事件等によって、天皇の御位から逐は（わ）れたのが、御年十七歳のときであり、それから当時としては異例の長寿の八十一歳で亡くなられるまで、鬱々と心楽しまぬ日々をお送りになつたや（よ）うです。粗暴な御振舞ひ（い）や、時の主上に対する悪罵の話が伝へ（え）られて居ります。

陽成天皇の御退位は、平安時代の比較的初期、天皇家の外戚、藤原氏の勢威が徐々に増大していく過程で起きた一大事件です。小倉百人一首では、陽成院の次から、陽成院ご自身や御退位に、直接、間接に関係した人たちの歌が並びます。源融（河原左大臣、陸奥のしのぶ文字ずり誰ゆゑに亂れせめにし我ならなくに）、光孝天皇（君がため春の野に出て若菜つむ我が衣手に雪は降りつつ）、在原業平（次に取上げます）、元良親王（わびぬれば今はた同じ難波なる身を盡しても逢はむとぞ思ふ）等です。

陽成天皇の御退位が不可避になると、時の摂政であり、高子皇太后の兄である藤原基経が主催して、皇族方の中から次の主上を選ぶ会議が開かれます。この会議には、基経に次ぐ実力政治家、賀茂川の河原近くに宏壮な邸宅を構へ（え）、河原左大臣と呼ばれた源融も出席して居りました。この人は源姓ながら嵯峨天皇の皇子ですから、「天皇家の血筋を引く者だつたら自分も居るよ」と発言して、基経から、「一旦臣籍に降下して臣下になつた方が、天皇家に戻つて皇位にお即きになつた先例はありません」とたしなめられます。

結局皇位を継がれたのは光孝天皇でした。この方は五十歳を越えたお年でしたが、学識豊か、且つ温厚なお人柄で、皇族方から尊敬されて居られました。宮中の「若菜」の行事を詠まれた「君がため」のお歌も、早春の清新の気溢れる秀歌です。在原業平は高子皇太后の元恋人、元良親王は陽成院の第一皇子で、ともに色好みの名の高い人たちでした。元良親王は光孝天皇の次の宇多天皇の晩年の寵妃、京極御息所を愛人にしてしまひ（い）ます。宇多天皇は、上の藤原基経の言つた先例に反して、一旦臣籍に降下された後、天皇位に即かれた方ですから、元良親王には元は臣下、との意識がおありだつたのかも知れませ

文語の苑

メールマガジン第十一号

文語歌曲「金剛石も、みがかずば」(七五調の歌詞)

日本で皆で聲を合せて同じ歌をうたふといふことはほとんどありませんでした。佛教には千僧供養といふ行事があつて、千人の僧が一齊に經典を讀み、聲明、陀羅尼を齊唱しますが、これは音楽とはいささか異なりません。慶應四年の戊辰戦争の折、薩長土の官軍のために「宮さん宮さん」とんやれ節(が作られこれが日本の齊唱の最初ではないでせうか。錦の御旗を掲げ足並を揃へ聲を揃へて前進する、これは一種の行進曲であり、軍歌でした。以後明治の前期に作られた歌は、暗黙のうちには國家體制とのかかはりを持つてゐたと言つても言過ぎではありません。幕藩體制に甘んじてゐたものが、中央集權國家へと體制が急變し、武家社會とはいひながら二五〇年の太平を樂しんでゐた社會から、植民地主義歐米に對抗するための富國強兵策へと轉換していつたのです。學校制度の整備にともなつて、そのやうな國策に添ひ校歌が作られました。その最初は前にとりあげた「みがかずば」ですが、同じやうに昭憲皇后が明治二十年に華族女學校、後の學習院女子大に下賜され、校歌になつたのが「金剛石も磨かずば」と「水は器に」の歌です。前は和歌だつたものが七五調になつてゐます。ただし、九年後には「新編教育唱歌集」に載せられ、「尋常小學唱歌」にも取上げられて一般的に歌はれるやうになりました。一方、校歌もこの頃から、全国的にはやるやうになります。校歌ではありませんが、「清く正しく美しく」を標榜する寶塚音樂學校では、入學式のときにこの金剛石・水は器にの歌が必ずうたはれるさうです。

一 金剛石もみがかずば／玉のひかりは沿はざらむ

人も學びて後にこそ／まことの徳は現るれ

時計のはりの絶間なく／めぐるがごとく時のまも

光陰(ひかげ)惜しみて勵みなば／いかなる業(わざ)かならざらむ

二 水は器にしたがひて／そのさまざまになりぬなり

人は交る友により／よきにあしきになりぬなり

己れに優るよき友を／えらび求めてもるともに

心の駒に鞭うちて／學の道に進むべし

* 金剛石 金屬で一番堅いものを金剛といひ、それに石のついた語は、天然礦物で一番硬度の高いダイヤモンドを指します。

* こそ 現るれ 「學ぶ」を強調するため「こそ」が使はれ、そのために文末の活用語「現はれる」が變化します。

* 勵みなば はげむ＝精を出した、ならば、若し勵んだならと言ふ以上に、「きつと」の意。

* 業(わざ)かならざらむ 「か」は反語で、否定の「む」と組んで一種の二重否定となり、肯定を強調する。どんな業でも成る。

文語の苑

メールマガジン第十一号

海ならず^{うみ} 愛國百人一首を讀む(七)

平成二十四年三月二十一日

うみならずたゞへる水の底までも清き心は月ぞ照らさむ

すがはらのみちかね
菅原道眞

「うみならず」の「ず」は「海なり」の打消連用形、次の「たゞへる」は八行四段動詞「湛ぶ」の已然形「たゞへ」に完了の助動詞「り」の連體形「る」が連結して次の「水」を修飾して、「海でもない程に満ち溢れてゐる」即ち大量の水を湛へる海よりもっと深い水を表現してゐます。其の水底までも月の光が届く程に澄んでゐる私の心は必ず天が照覽せ^{あきら}めよと、冤罪の我が身を歎きながらもなほ忠誠を表明した歌となつてゐます。

詠者菅原道眞が藤原時平に讒せられて、太宰府流刑となつたことは

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな

東風が吹く季節には梅の花よ其の香りを太宰府まで送れよ、庭の主が居ないからと言つて

春を忘れるなよ

の歌也、

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

去年の今夜清涼^{せいりやう}に侍す 秋思^{しうし}の詩篇獨り斷腸 恩賜の御衣今此に在り 捧持^{ほうぢ}して毎日餘香を拜す

去年の今夜は清涼殿での宴に参加して、秋を思ふ詩を作り、御衣を賜つた。その御衣は今茲にあり、大切に頂いて毎日その時の香を思ひ出してゐることである

の漢詩でよく知られてゐますが、道眞の日本歴史に於ける足跡として、一つは寛平六年(八九四)の遣唐使の廢止、もう一つが「日本三代實錄」の撰録への参加の二つが挙げられます。後者は延喜元年(九〇一)道眞左遷の直後に完成し、撰者は時平となつてゐますが、内容、文章ともに六國史の最後を飾り、後世史書の模範とされましたのは、道眞の力が大きく與つてゐたと考へられます。この時漢字の傳來以來約五百年、漢文化は最高峰に到達し、同時に、其の四年後の延喜五年には、それまでの敕撰漢詩集に代り、古今和歌集が完成し、國文文化が擡頭することになります。この大きな文化變革期に道眞は遣唐使の廢止の他に、新撰萬葉集の撰進にも關與し、指導的な役割を果たしたのでした。それだけに左遷は残念であつたに違ひありません。道眞はしかし太宰府で恭順の意を表しつゝ二年後に歿することになります。

掲出の歌は、「月ぞ照らさむ」と「照」に神佛が見そなはず意味の「照覽」を結び付けて、やがて疑ひ曇れることを信ずる道眞の氣持がよく出てゐます。しかしその死後には怨靈と恐れられて北野天滿宮に祀られ、今日では學問の神様として、學問の成就を願ふ若者の參詣が絶えません。

市川浩

文語の苑

メールマガジン第十一号

わくらば

大堰川井堰の水のわくらばに今日は恃めし暮にやはあらぬ（新古今）

下の句、「恃め」は「恃む」の連用形なり。

「恃む」の連用形は「恃み」にあらずやと異を立つるなかれ。

そもそも文語に於ては、終止形を同じくしながら、四段活用と下二段活用と、二つの活用に跨がる動詞、少なからず。その多くは、四段活用は「自ら斯くは爲す」の意、下二段活用は「人をして斯くは爲さしむ」の意を有す。

「恃む」は、四段に活用するに於ては、自ら、人の言を「頼りとす」の意なれども、下二段に活用すれば、則ち「人をして自らの言を頼りにせしむ」と解くべし。

「けふは恃めし暮にやはあらぬ」とは、女、男を恨みて、「今宵は、汝の我をして汝の言を頼りにせしめたる暮にあらずや」と言ひてあり。男、女の許を訪れむと誓ひたるに、違背するありて、女、心外に思ひたるなり。

上の句、大堰川は、京都嵐山、渡月橋の架かれる保津川の上流の謂ひ、水田に灌漑する井堰のありければ斯くは名付くるなり。

「井」は「飲まむが爲に水を汲む所」なれど、水を汲む所は流れの定めるが常にて、すなはち堰き止めたる所に異ならず。

また、「堰」は「堰く」の連用形を名詞に用ゐたり。「堰く」は、「遮りて通さず」の意にして、水の流れを止（とど）むる所を指すに至る。

然則、「井」と「堰」とは意を同じうす。これによりて、「おほゐがは」の「ゐ」に「堰」を用ゐたるなり。「井堰」は「井」にして「堰」、轉じて川を堰き止めて水を溜めたるを言ふ。

「わくらば」とは何ぞや。後世には、「夏、時ならぬに色を變じて落ちたる葉」を指して、「病葉」の文字を宛つるといへども、中古においては、斯かる意に用ゐらるることなし。

「わくらば」は副詞にして、「偶然に」「稀に」の意。

汝の我を思ふ心淺ければ、訪れ來たること稀なり。今日たまさかに約定したる、嬉しきに堪へずして待ちぬたるに、日暮れなむとして、その氣配なし。ああ、輕薄の人、なんぞ欺きたる。

下の句は斯く言へるなり。

「井堰の水」は「わくらば」と何のかかはりかあらむ。

水の湧出するを、「湧く」といふ。「水の湧く」を轉じて、「水のわくらば」と續けたるすなはち序詞にして且つ掛詞なり。

「わくらば」に「病葉」を宛つるは、江戸の世に及びてやうやく其の例を見る。一茶の句に「病葉のしんぼ強くはなかりけり」とあり。

「病葉」なる語彙の如何にして生じたるか、いささか分明ならず。

私見を申さば、恐らくは、この新古今の歌の誤解を招きたるならむ。副詞「わくらば」を知らざる人、この歌を目にしたらむには、「ば」の音にて終るがゆゑに「葉は」の濁れるなりと速断して、「大堰川の水面に浮ぶ枯葉を眺めつつ男の誠なきを歎く女」を思ひ起すべし。

かくして、「わくらば」なる言の葉の「夏の枯葉」を指すに至りたりとぞ思はるる。

名高き歌なれば、後の人をして惑はしめたるも異とするに足らず。

詠人は、清原元輔。清少納言の父なり。

今、右に、此は「女の男を恨みたる歌」と説きたり。

詠人は男、然而、女の恨みとは何ぞや。

古への歌には、男の女の心になりて詠める、其の例極めて多し。西行、定家は、作れる歌の半ば、女の戀の歎きの歌なり。豈に怪しむべけむや。

後鳥羽院は、斬新なる現代風の歌論を唱へたまひ、歌は心の儘に出づるに非ずば甲斐なしと仰せらる。すなはち、男が女の身になりて詠みたる歌は心籠らずとて、定家の歌風を難じ給へることあり。然れども、院は、西行の歌を甚く稱讚し給ふ。その天賦の才を「生得の歌人」と認めたまへるなり。

定家を誇りて、西行を讃へ給ひしは理に合はざるが如くあれど、定家に對して、ややもすれば私憤を懷きたまへるゆゑならむか。

文語の苑

メールマガジン第十一号

東日本大震災追悼式典

日本列島を震撼せし東日本大震災。今迄見たることなき巨大なる津波押し寄せ、あらゆるものを飲み込みて行く様を、身体の硬直するを感じつつ茫然とテレビの画面に見入ったりし人々多かりき。あの忌はしき日より既に一年過ぎ、三月十一日には日本各地にて様々なる式典が執り行はれき。そのひとつが、国立劇場にて開催せられし政府主催の追悼式典なりき。弊社はその式典にて読まるる挨拶文の英訳を依頼せられぬ。天皇陛下のお言葉もその一つなれど、陛下は心臓の手術を受けられ、退院はなされしものの式典への御来臨あるや否や取りざたされぬ。式典前日になり、陛下のお言葉深夜最終文書 作成せらるるや、弊社英訳作業より外され、外務省担当する運びとなりき、いかにも残念なり。弊社は総理大臣以下、衆参両院議長、最高裁長官、加へて被災地・福島、岩手、宮城の遺族代表と全七つの挨拶文を担当せり。被災地の代表挨拶は涙なしには読むこと能はざりき。翻訳する過程にて深き悲しみ、無念さなどの気持ち湧き出で自づと訳文に籠りぬ。正確性の確認、英国人の編集後の確認等、その後幾度も目を通せど、そのたびに涙がこぼれぬ。翻訳をしつつかかる感情の入るも珍しきことなり。追悼式典に参加せる多くの外国の代表団も涙を拭ひぬたりと後より聞き、被災地遺族代表の思ひは確実に伝はりしなりと、意義ある翻訳を担当せりと覚ゆ。テレビ中継にて遺族の悲しみ深く心に沁みわたりて、偉大なる自然の力の前に人間のはかなさを思ひ知りぬ。

赤谷慶子